

まだ間に合う！秋作ムギ類のご紹介

- ポイント
- ・ムギ類はイタリアンライグラスより播種適期が広い。
 - ・草種ごとに耐寒性や利用目的が異なる。
 - ・収穫適期を守ることで栄養価と収量を確保できる。

1. はじめに

飼料用ムギ類はイタリアンライグラスに次いで都府県での利用面積が大きい秋作の飼料作物です。イタリアンライグラスよりも播種適期が広く、利用しやすいことが特長です。ムギ類にはエンバク、オオムギ、ライムギ、ライコムギなどがあり、草種や品種の違いによって特性は大きく異なります。それぞれの特性を十分に理解し、目的に応じた草種や品種を選定する必要があります。今回は、本号が発行される10月以降に秋播きできる各ムギ類の特性と利用方法について紹介します。

2. 草種別の特性と使い分けについて

表1に各種ムギ類とイタリアンライグラスとの特

性を比較して示しました。一般的にムギ類の方が耐寒性に優れ、イタリアンライグラスは耐湿性や嗜好性が優れます。イタリアンライグラスの播種期は10月中が主となっていますが、ムギ類は耐寒性が強いいため、イタリアンライグラスの播種適期から外れる11月以降でも播種することが可能です。以下にムギ類の草種別の特性と推奨品種を紹介します。

(1) エンバク

他のムギ類に比べると耐寒性はやや劣りますが、適応する土壌pHが広く、耐湿性も他のムギ類より優れるため比較的作りやすい作物です。メインで利用されるのは極早生エンバクの晩夏播き年内刈りの作型ですが、秋播きでも利用することができます。ただし表1に示すように、エンバクは他のムギ類に比べて耐寒性がやや劣るため、寒高冷地での秋播き栽培は冬枯れのリスクがあります。耐寒性についても品種間差があります。エンバクの耐寒性には限界がありますので、寒冷地での越冬栽培には、寒さに強い他のムギ類を利用してください。

おすすめ品種

【ウルトラハヤテ韋駄天（品種 韋駄天[※]）】(写真1)
PVP ※海外持出禁止（農林水産大臣公示有）
ウルトラハヤテ韋駄天は細茎で乾きが早く、耐倒

表1 イタリアンライグラスとムギ類の一般特性							
草種	低温発芽性	耐寒性	耐雪性	耐湿性	収量性	嗜好性	夏・春播き適正
イタリアンライグラス	○	△	×～△	○	◎	◎	△～○
エンバク	○	△	×	△	◎	○	◎
ライムギ	◎	◎	◎	×	◎	△～○	×
ライコムギ	○	○	×～△	×	◎	○	×
オオムギ	◎	○	×～△	×	○	○	○

注1) ◎：極良、極強、好適 ○：良、強、適 △：やや不良、やや弱、普通 ×：極不良、弱、不適
注2) 各草種の一般特性を示したもので、品種によっては表と一致しないものもあります。



写真1 ウルトラハヤテ韋駄天の草姿

伏性に優れる品種です。当社の極早生エンバクの中では最も耐寒性に優れ、秋播きしても冬枯れのリスクは少ないため10月以降の播種にすすめる品種です。

【ニューオールマイティ】

直立型で草丈が高く大型の多収な中生品種です。主な用途は青刈りで、出穂前に刈取ると再生利用も可能です。大型ですが比較的倒伏にも強く、レッドリーフ病や冠さび病にも耐性があります。

(2) オオムギ

オオムギはエンバクよりも耐寒性に優れ、ムギ類の中でも嗜好性が良くサイレージ適性も高いとされています。また、イタリアンライグラスとの混播適性が高く、収量アップや予乾日数の短縮が期待できます。しかし、オオムギを含めたムギ類全般は、稈が太く中が空洞なため、サイレージに調製するときに密度が不十分で二次発酵やカビが発生しやすくなります。なるべく収穫はモアコンディショナーを使用して茎をつぶすようにした方が良いでしょう。

オオムギはエンバクに比べると湿害や酸性土壌に弱く生育不良になりやすいため、必要に応じて圃場の排水対策や、石灰などでの土壌改良（酸度矯正）を行うなどを心がけてください。

おすすめ品種

【ワセドリ2条】(写真2)

飼料用に選抜した極早生の2条オオムギです。耐倒伏性に優れ、オオムギの主要病害のひとつであるうどん粉病にも抵抗性があるため、利用しやすい品種です。極早生エンバクのように晩夏播きで年内収穫も可能であり、秋播きして早春に収穫する体系にも向いています。



写真2 ワセドリ2条の草姿



写真3 ムサシボウの草姿

【ムサシボウ】(写真3)

穂に発生する野毛（芒：のぎ）は出穂期以降次第に固くなり、嗜好性を低下させる原因となります。この野毛を無くすように改良した中生品種がムサシボウです^{*}。出穂期は極早生の「ワセドリ2条」よりも

10日から2週間ほど遅く、大型多収な品種です。しかし、「縞萎縮病」には抵抗性が無く、罹病すると大きく減収するため、本病の発生地域での栽培は避けてください。

※ムサシボウは野毛が出ないように改良した品種ですが、野毛のある個体が少量ながら発生することがあります（異品種の混入ではありません）。

（3）ライムギ

ライムギは耐寒性や耐雪性に優れ、寒冷地や標高が高い地域でも栽培可能な草種です。やせ地でも比較的良く生育するため、北海道から九州まで広く栽培されています。自給飼料の中で最も秋遅くまで播くことができるうえ、多収が期待できます。出穂以降は茎が固くなり急激に嗜好性が低下するため、子実を付けてから収穫する他のムギ類とは異なり、出穂初期までに収穫することを心がけましょう。

おすすめ品種

【春一番】（写真4）

耐寒性、耐雪性に優れる極早生品種で、早春より生育旺盛で早期に多収となるため、東北地方でのトウモロコシの裏作としても適しています。西南暖地では12月下旬まで播種が可能のため、天候の影響で播種が遅くなってしまった場合や前作の収穫が遅くなってしまった場合にも播種が可能です。

【春香】

春一番より、出穂が10日ほど遅い晩生のライムギです。収穫適期の草丈は130cm程度と高くはありませんが、分げつが多く、収量が多い品種です。紅色雪腐病に抵抗性があるため、根雪期間が3か月以上の豪雪地帯でも利用することができます。

（4）ライコムギ

ライコムギはライムギとコムギをかけ合わせて育成された草種であり、飼料用ムギ類の中では比較的新しい草種です。ライムギ由来の優れた耐寒性を持ちながら、収穫適期の幅はライムギよりも広いため利用しやすいのが特長です。ライムギに比べると嗜好性が低下する速度は遅いですが、収穫はライムギ同様出穂期までに行うことをおすすめします。

おすすめ品種

【ライコッコ4（品種 T100）】（写真5）

極早生のライコムギです。耐寒性や低温発芽性は



写真4 春一番の草姿



写真5 ライコッコ4の草姿

エンバクより優れますが、耐雪性は低いので、積雪地帯での利用は避けましょう。耐倒伏性が非常に優れるため、イタリアンライグラスと混播栽培すると支柱の役割を果たし、倒伏軽減の効果があります。

3. 収穫時期について

飼料作物は収穫のタイミングが非常に重要です。刈り遅れると栄養価や嗜好性の低下を引き起こし、早刈りをしていても収量が低下してしまいます。この章ではそれぞれのムギ類の収穫時期について紹介します。

（1）エンバク・オオムギ

エンバクとオオムギは乳熟期（子実の内容物が乳液状の時期）や糊熟期（子実の内容物が糊状の時期）が収量と栄養価のバランスが良いとされており、糊熟期以降は繊維質が増えて消化性が落ちてしまいます。上記の熟期を目指し、出穂期から2～3週間後を目安に収穫するようにしましょう。

表2 秋播きムギ類の収穫時期目安（11月上旬の播種を想定）

草種	品種名*	西南暖地						関東地方					
		3/中	3/下	4/上	4/中	4/下	5/上	4/中	4/下	5/上	5/中	5/下	6/上
エンバク	ウルトラハヤテ韋駄天（品種 韋駄天）												
	ニューオールマイティ												
オオムギ	ワセドリ2条												
	ムサシボウ												
ライムギ	春一番												
ライコムギ	ライコッコ4（品種 T100）												

*商品名が付けられている品目は、品種名を括弧書きで記載しています。

（2）ライムギ・ライコムギ

ライムギは出穂期を越えると茎が硬くなり、急激に嗜好性が低下していきます。前述した実をつけてから収穫するエンバク・オオムギとは違い、なるべく出穂初期までに収穫することを心がけてください。一方、ライコムギはライムギに比べると嗜好性の低下は遅いですが、こちらも出穂期までに収穫することをおすすめします。

表2に秋播きムギ類における収穫時期の目安をまとめました。本表は、当社宮崎研究農場および千葉研究農場における出穂時期等を参考に作成しています。なお、記載の収穫時期はあくまで目安です。実際の収穫にあたっては、生育状況等をご確認のうえ、ご判断ください。

4. おわりに

ここまで秋冬作のムギ類についてご紹介してきました。ムギ類は耐寒性に優れ、播種期の幅も広いことから非常に利用しやすい作物です。また、飼料用にとどまらず緑肥としての使い方ができる作物でもあります。各草種・品種の性質・特長を確認し、地域性や栽培体系、経営状況などに合った品種を選択して、安定した自給飼料生産に役立てていただきたいと思います。不明な点などございましたらお気軽に最寄りの営業所または研究農場までお問い合わせください。